

# 令和5年度病害虫発生予察情報 発生予報第7号(8月)

令和5年8月29日  
発表：福島県病害虫防除所

## 1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	天候予報（仙台管区气象台8月24日発表）によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並から多いと予想されている（±）。	開花後20～40日頃に薬剤を1～2回散布する。その際、薬剤が莢に十分付着するようにする。 適期収穫及び速やかな乾燥調製を心がける。
	吸実性カメムシ類	全域	—	平年並	8月の巡回調査では、発生量は平年並だった（±）。	発生がみられる場合は着莢期（8月中下旬）～子実肥大期（9月上～下旬）に薬剤散布を実施する。
	フタスジヒメハマシ	中通り 浜通り <b>会津</b>	—	平年並  <b>やや多い</b>	8月の払落し成虫数は、 <b>会津で平年より多かった（+）</b> 。	発生がみられる場合は子実肥大期に薬剤散布を実施する。
	マメシンクイガ	中通り 会津 <b>浜通り</b>	—	平年並  <b>やや多い</b>	前年の被害粒率は、 <b>浜通りで平年よりやや多かった（+）</b> 。	<u>3年以上連作しているほ場では、被害が急激に増えるため</u> 、薬剤散布を実施する。

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

## 2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)	
	<b>褐斑病</b>	<b>全域</b>	—	<b>やや多い</b>	<b>新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。</b>	<b>8月中旬に降雨があったため、今後本病の発生が急増するおそれがある。本病の発生が多い場合は、晩生種に対し特別散布を実施する。</b>
	炭疽病	全域	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	降雨が多い場合は9月上旬以降も防除を行う。
	<b>キンモンホソガ</b>	<b>中通り 会津</b>	— —	<b>やや多い 平年並</b>	<b>新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年よりやや高く(+)、会津では平年並(±)であった。</b>	<b>本種の発生が多い場合は、防除を行う。</b>
	シンクイムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。
	ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	<b>ハダニ類</b>	<b>全域</b>	—	<b>やや多い</b>	<b>新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。</b>	<b>園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。</b>
モモ	せん孔細菌病	中通り	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	秋雨や台風の襲来が増加する時期なので、天候に注意しながら秋期防除を徹底する(令和5年8月29日付け令和5年度病害虫防除情報(モモせん孔細菌病)参照)。
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	<b>ハダニ類</b>	<b>中通り</b>	—	<b>やや多い</b>	<b>新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。</b>	<b>園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。</b>
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	本病の発生が多い場合は、「幸水」収穫後に秋期防除を行う。
	シンクイムシ類	全域	—	<b>やや多い</b>	<b>ナシヒメシンクイによる果実被害の発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。</b>	<b>シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。</b>
	ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	

	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった（±）。	園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施する。
果樹共通	カメムシ類	中通り 浜通り 会津	— — —	平年並 やや多い 平年並	中通りのリンゴ、ナシ、会津のリンゴでの果実被害の発生ほ場割合は平年並であった（±）。 <b>浜通りのナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年よりやや高かった（+）。</b>	<b>新成虫の活動が活発な時期なので、園地への飛来を確認したら薬剤散布を実施する。</b>

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

モモ	<p><b>■せん孔細菌病</b></p> <p>病害虫防除所の巡回調査の結果、8月上旬に比べ8月中旬は、新梢葉における発生ほ場割合が増加しました。</p> <p>来年の春型枝病斑の発生を抑制するため、秋期防除を行い越冬菌密度を低下させてください。防除はボルドー液等の無機銅剤を用いて9月上旬以降、2週間間隔で3回行います。天候に注意しながら降雨前の散布を徹底してください。なお、高温時の散布は薬害を生じる可能性があるため、十分注意してください（令和5年8月29日付け令和5年度病害虫防除情報（モモせん孔細菌病）参照）。</p>
ナシ	<p><b>■ナシヒメシクイ</b></p> <p>ナシヒメシクイ第4世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、8月6半旬ごろと予測され、第5世代幼虫の防除適期は9月1半旬ごろと推定されます（農業総合センター果樹研究所、8月15日現在）。</p> <p>本種は、モモ等の核果類の新梢伸長が停止すると、ナシ果実への寄生が増加します。例年、ナシの果実被害が多い地域では、今回以降の防除を徹底してください。</p>
果樹共通	<p><b>■果実吸蛾類</b></p> <p>果実が成熟し始めると、果実吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。果実吸蛾類は山林原野に生息しているため、そういった場所に近い園地では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜（砂糖200g、酒200cc、酢200cc、水1400ccを混ぜ合わせたもの）を誘引源とした食餌トラップが有効です。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（+）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	すすかび病	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ほ場の開口部をネット被覆するように努める。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年より低かった（-）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（+）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、加湿防止、資材の消毒に努める。
	褐斑病	全 域	-	平年並	発生ほ場割合は平年より低かった（-）が、天候予報（仙台管区気象台8月24日発表）によると、向こう1か月は気温がかなり高くなると予想されている（+）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	つる枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（+）。	発病葉や発病枝は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（+）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（+）。	低密度時から防除を徹底する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。

	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった(±)が、天候予報によると、向こう1か月は気温がかなり高くなると予想されている(+)	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった(±)。天候予報によると、向こう1か月は気温がかなり高くなると予想されている(+)	低密度時から防除を実施する。薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった(+)	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
リンドウ ※過去8 年間の平 均値と比 較	葉枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年より高かった(+)	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	黒斑病	全 域	-	例年並	発生ほ場割合は例年並であった(±)	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年より高かった(+)	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年より低かった(-)が、天候予報によると、向こう1か月は気温がかなり高くなると予想されている(+)	ほ場をよく観察し、防除を徹底する。
野菜・花き共通	タバコガ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)	生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト (被覆栽培)	<p><b>■トマトキバガ</b></p> <p>本種は南アメリカ原産で、国内では、2021(令和3)年10月に熊本県、同年12月に宮崎県のトマトほ場で初めて確認されて以降、鹿児島県、大分県等の九州・西日本で確認され、7月には青森県、秋田県、北海道及び宮城県等、東北地方でトラップによる誘殺が相次いで確認されています。本種は、幼虫がトマトの葉や果実を加害し、収量や品質の低下を引き起こします。葉では内部に潜り込んで食害するため、被害部分は表面だけが残って薄皮状になります。果実では表面に数mm程度の穴を開けて内部を食害するため、果実表面の穴と食害部分の腐敗によって果実品質が著しく低下します。(詳細は、令和5年度特殊報第1号 5病防第36号を参考)</p> <p><b>■トマトかいよう病</b></p> <p>本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p>
夏秋キュウリ (露地栽培)	<p><b>■アザミウマ類</b></p> <p>アザミウマ類による花への寄生が多く確認されています。春から秋にかけては周辺の雑草地等で増殖し、常時成虫の飛び込みがあること、生育過程で植物組織中の卵や土中の蛹など薬剤がかかりにくいステージがあることから薬剤のみの防除では十分な効果が得られない場合があります。耕種的防除、物理的防除等も取り入れた総合的な防除を行う必要があります。</p>

	<p>アザミウマ類の発生源となるほ場内外の除草を徹底し、摘葉や摘芯等により生じた残渣には、アザミウマ類が寄生している場合があるので、放置せずビニール袋に密閉するなどして適切に処分する。定植期に使用可能な薬剤がある場合は施用するとともに、ほ場内の発生状況をよく観察し、発生初期に薬剤防除を行う、薬剤抵抗性の発達を防止するため、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う等の対策をお願いします。</p>
キク（露地栽培）	<p><b>■わい化病（キクわい化ウイルス）</b></p> <p>本病に感染したキクは健全株に比べ節間が詰まり、被害が大きいと草丈が 1/2 から 1/3 にわい化する。本県では 6 月頃から、キクのわい化症状がみられる。本病は、親株でのほ場への持ち込みが多いと思われる。また、品種間差があり、無病徴感染している場合もある。</p> <p>防除対策として、罹病苗をほ場に持ち込まないことが最も重要であり、病徴が認められたほ場では、親株を更新する。育苗時には、罹病株の残さが混入している土壌は用いず、苗同士の根の接触の少ない育苗（セル成形苗など）を行う。発病がみられた株は速やかに抜き取り、適切な処理（土中深くに埋める、焼却処分する、袋等で密閉して腐敗させるなど）を行う。作業時には、頻繁にハサミをかえるか消毒することにより、汁液伝染を防ぐ。</p>
野菜・花き共通	<p><b>■ウイルス病（アブラムシ類、アザミウマ類媒介による）</b></p> <p>アザミウマ類が媒介するトマト黄化えそウイルス (TSWV)、アブラムシ類が媒介するキュウリモザイクウイルス (CMV) の発生を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV 及び ZYMV 等のウイルスの重複感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p>

より詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

- ◆福島県では6月10日から9月10日まで令和5年度農薬危害防止運動を実施中です。
- ◆農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。